医事・文談　九百六十五　平岸　三八

《正岡子規（36）の続き》その253
子規周辺の人びと（三）

子規の父、八代正岡常尚は、安政元年（一八五四）倉根半蔵の娘と結婚、一子を挙げたが、妻は安政6年5月14日没し、一子数馬も夭死した。

その後、長らく常尚は独身を保っていたが、慶応元年（一八六五）大原有恒（観山）の長女・八重と再婚したことは前述した。

常尚は藩主の江戸勤番に従ったり、三津浜常詰となり、その間嫡子数馬は母方の倉根家で預かっていたので敢て再婚を望まなかったのかもしれない。

一子を失ったことにより、改めて再婚の意志を固め、慶応元年（一八六五）10月26日、大原八重と結ばれた。

若し正岡常尚が前妻を失わず、即ち大原八重を後妻として迎えなければ、正岡子規の誕生はなかったことになる。子規が、正岡家の九代としての出生は、常尚・八重の結婚がなければ生じなかったことは厳然たる事実である。

前妻の死去があっても、後妻として大原八重以外の者を迎えたならば、子規の誕生はなかったことになる。

前妻の死去という不幸が、子規を出生せしめたということを、我々はいかに解すべきであろう。世に禍を転じて福と成すという諺があるが、正岡家にとっては、前妻の死亡により、後妻の八重を迎えたことが、常規という非凡の文学者を産み、後世永久に正岡の名を不朽ならしめたこととなるのである。正岡家にとっては、誠に幸運であったと言わねばならない。

正岡家の幸いであるばかりでなく、日本文学史上、燦として輝く一大明星を得た幸福を我々は持つこととなるのである。

人間が、父系と母系の両方から素質を受けていることは明白である。精子と卵子がそれぞれの遺伝子を荷って結合し、新しい生物を誕生させるのである。

子規の父・正岡常尚（通称は隼太）は、子規の記述によると一見凡庸な人物であったらしい。勿論、子規が6歳の時に、40歳を一期として死去しているのであるから、子規は直接その性格挙動を知らない。成長に従って周囲から聞かされたものである。学問にも、武芸にもたけず、毎日、毎日一升位の酒を傾けていたという。

封建時代のこと、上士は上士、下士は下士で、身分が定められていたから、よほどの才能の発揮がなければ昇進は望めない。子規の父も身分制からの脱却を願ったが、叶えられないので、その憂悶を酒にまぎらしていたのかもしれない。或は内心、鬱勃たる気に溢れた人物であったかもしれないが、世にあらわれた彼の才能はないのであるから、やはりあまりすぐれた人物ではなかったということになるのであろう。

それに反し、母方の祖父・大原有恒（号・観山）は松山藩の儒者として、江戸に出て昌平黌に学び、帰国して藩校明教館の教授となった。観山の妻・重の父、歌原松陽も藩の漢学者で、観山の少年時代の師である。

外祖父、大原観山は学者であり、その妻の父も同じく学者であった。観山には四男三女があり、長女・八重は正岡家に嫁し、長男は早世。二男・恒徳（嘉永4年〈一八五一〉）は、永く正岡家の後見となった。二女・十重（嘉永6年〈一八五三〉）は藤野　漸に嫁し、潔（古白）、琴子を生んだ。三女・三重は岸　重崖に嫁し、二男五女があった。三男・恒忠（安政6年〈一八五九〉）は加藤家を継ぎ、外交官・政治家として活躍した号拓川であり、子規の生涯にわたり、精神的、経済的の支援をした人物として知られる。

子規の上京を勧めたのも拓川であり、子規終生の物心両面の庇護者となった陸　羯南を紹介したのも拓川であった。その三男・忠三郎は子規没後、妹律の養子となり正岡家の相続者となった。

このように幼時教えを受けたのも観山であり、その後の一生にも観山の一族との関係は深かった。

こう見てくると、子規には父系より、母系の方からの影響や資質を強く受けているようである。

お知らせ

北海道医報ファイルの送付について

北海道医師会広報部では、北海道医報を整理・保存するためのファイルを作成しております。ご希望の向きは下記までご連絡下さい。無償にてお送りいたします。

記

申込先：北海道医師会事業第二課

〒060-8627 札幌市中央区大通西6丁目

TEL(011)231-1725 FAX(011)252-3233